

Title	定家筆の私家集切 : 遍昭集・興風集・貫之集・恵慶 集・高光集・長能集について
Author(s)	伊井,春樹
Citation	詞林. 1987, 1, p. 48-54
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67238
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

定家筆の 私家 · 集 切

遍昭 集・興風集・貫之集・ 恵慶集・髙光集・長能集について――

にはおれない。ただ、すべての断簡を示すことはできないので、こ るが、なお丹念に収拾して行くと、諸記録からもまったくうかがい して、ここに古筆切を取り上げる。一部はすでに明らかにされてい それは膨大な量が予想されるが、その具体的な冊子本以外の資料と は、その生産においてどれほどの古典を書写したり校合したのか、 察がもっぱらで、トータルとしての古筆切には及んでいない。定家 た書写した伝本や他の書写本に付された織語とか諸記録等からの考 まなされている。しかし、それは現存する作品に関してであり、ま るまでもなく偉大なものがあり、またその方面からの研究もさまざ こでは私家集を対象とする。 知れなかった定家筆の作品がいかに多いことか、あらためて驚かず 古典文学における定家の果たした役割というのは、いまさら述べ

> 作品を扱うことにする。 は『私家集大成』の巻数、「20」は所収作品番号を意味し、つぎの た。なお、量的な問題もあるので、ここではサブタイトルに記した (47-54)は歌番号を示す。また、歌の後にそれぞれの出典を掲げ

伊

井

春

樹

20遍昭集

47

今さらに我はかへらしたきみつゝ かくしつゝとにもかくにもなからへて よへときかすとゝはゝこたへよ きみかやちよにあふよしも哉 仁和御時八十賀たまふに しかよりかへりける女ともの花山に

よそにみてかへらむ人にふちの花 はひまつはれよえたはおるとも

いりてふちの花のもとによりて

みけれは

列していくことにする。作品名の頭に(1―20)とするのは、「1」

号)、その後も新たな資料を見いだすなど、今後も調査の進展によ

るが(「古筆切・古筆手鑑の世界」「解釈と鑑賞」昭和六一年六月

定家筆の私家集切は、主なものについてすでに指摘したことがあ

って改訂する必要があろう。以下、私家集大成本の所収順に従い配

48

こめやとは思ものからひくらしの

いましはとわひにしものをさゝかにのなくゆふかけはたちまたれける

、もしはこ思切いらったなっなにかゝり我をたのむる

またるゝことのまたやまぬかないましはと思物からわすれつゝ

人のいひけるころ山に侍けるに

あふみのみやす所けしきありて

あふみてふ君はたかしまにたてれともみやす所のもとに

とのたまへるにいつらはこゝにくる本のさと

なに許ふかくもいらすあしひきの

ひえをと山とおもふはかりそ

「神野家並某家所藏品入札売立目録」(名古屋)昭和八年六月

二十日

の伝本は、第一類本の後に古今集などから二〇首の歌を増補した体後者の第二類本は今のところ書陵部本が知られるだけだが、ただこ二句)の二類に分かれ、前者に二首増補したのが正保版本である。首、連歌二句)と、〔2〕書陵部御所本三十六人集(五三首と連歌首、連歌二句)と、〔2〕書陵部御所本三十六集系統本(歌数三三遍昭集は、大きくは〔1〕西本願寺本三十六集系統本(歌数三三

書陵部本は、巻末に、

伝称歌も含めて、未収載歌を一括巻末に加えたのが第二類本という裁になっている。このように、第一類本が本来の姿であり、それに

此二牧者字喜多宰相依/所望進之也、

文禄三(甲午)七月八日羽林郎藤判

まで遡るのか判断のしようがない。
まで遡るのか判断のしようがない。
まで遡るのか判断のしようがない。
まで遡るのか判断のしようがない。
まで遡るのか判断のしようがない。

ところで、右に定家筆遍昭集切を示したように、これは四七からところで、右に定家筆遍昭集切を示したように、これは巻子本たと知られる。また、本断簡は一面二四行もあるが、これは巻子本たと知られる。また、本断簡は一面二四行もあるが、これは巻子本たと知られる。また、本断簡は一面二四行もあるが、これは巻子本たと知られる。また、本断簡は一面二四行もあるが、これは巻子本であるためで、こうなると為満の記した「此二牧」が「巻」であるであるためで、こうなると為満の記した「此二牧」が「巻」であるであるためで、こうなると為満の記した「此二牧」が「巻」であるであるためで、こうなると為満の記した「此二牧」が「巻」であるが、本文はまったく一致する。

二 1-26 興風集

吹風にとまりもあへすちる時はいとゝかすみのたちかくすらむ

やへ山吹の花もかひなし

「堺市宅職春軒所蔵品入札第二回」(大阪)大正二年六月十四

類名家集切の大まかに四種に分けられる。そのうち伝坊門局筆本は 伝坊門局筆本(六六首)、〔3〕西本願寺本(五七首)、〔4〕部 興風集の伝本は、〔1〕正保版本歌仙家集本(五二首)、〔2〕

に九首加えたのが、私家集大成にIとして翻刻される書陵部本(五 によるのか、現存本には定家の書入れがみられる。この伝本にさら の坊門局(生年未詳―一二〇〇)は俊成女で、定家の姉という関係 〔1〕の後に二首加え、さらに「二」として一一首追補される。こ

〇一・一一五)である。ところで、右の定家筆切は、伝坊門局筆よ 時、すでに伝坊門局筆の六六首本も、それと緊密な関係にあるさら りもさらに九首増補された部分の、六九・七〇番歌に相当する。当

両者どのよう関連にあるのか、伝本の流布状況について興味ある点 るはずだが、それとはまた別の七五首本を写しているというのは、 に定家の書き入れがあることから、彼は明らかに六六首本を見てい に九首を加えた七五首本も存在していたことになる。伝坊門局筆本

1-57貫之集 I

だが、ここではその指摘にとどめておきたい。

①340 -343

おもひかねいもかりゆけは冬の夜の(頭部に「拾」) おなし六年春左衛門督殿屛風うた冬

河風さむみちとりなくなり おなし八年八条の右大将本院の北方

七十賀せらるゝ時の屛風 春人の家

ひさしき事のためしなりけれ かはらすもみゆる松かなむへしこそ

ふちの花

なこりをは松にかけつゝもゝとせの はるのみなとにさけるふちなみ

山さと

「翰墨城」

@ 551 556

山かけにつくる山田のこかくれてほにいてぬ

こひそわひしかりける

もゆれともしるしたになきふしのねに

おもふ中をはたとへさらなん

たむけせぬわかれする身のわひしきは

人めをたひと思なりけり

おきてしくれはそてそひちぬる

なかき夜に思あかしてあさつゆの

たなはたに思ものからあふことのいつともしらぬ

もゝはかははねかくしきもわかことく あしたわひしきかすはまさらし

『かな古筆てかがみ』(66)・『てかゞみ』(29)『なつやま』

3557-561 かさすともたちとたちにしなきなには

あふことの Pまひこ してた ことなしくさもかひやなからん

あふことのやまひこにしてそ ならは

たなはたのとしに(不読)ある人めもわれはよかすそあらまし

人めに(不読)ありけるたなはたのとしに(不読)あふことは

つねよりことにまさるわかこひまこももかるよとのさは水あめふれは(頭部「古」)

うつゝに人にわかれぬるかなよそに見てかへるゆめたにあるものを

集』(36)・「野辺のみどり」(25)「古筆」(206)・「書道芸術」・(16―86)・「手鑑第三

れも正保版本歌仙家集本と一致する。 貫之集は今のところ右の三葉一五首を見いだすにすぎなく、いず

1-104 恵慶集

池の氷

浪よするあしのうらはもをとせぬは

池の氷やとちはてぬらむ

「書画美術品展観入札売立会」(大阪)昭和三十八年十二月五

②120·解題

としのをはりにこよみのちく

のもとまてまきよせたる心

人々よむに

まきよするこよみの心はつかしく

のこりのひゝにおい見えにけり

つこもりの夜としのゆきかふ

心人々よむに

いのこういいはらりがまこう ふるゆきにかすみあひてやいたるらん

としゆきちかふはるのおほそら

勢某家当市某大家所藏品壳立」(名古屋)大正十五年十月十四「吹原家所藏品入札」(名古屋)大正十三年六月十七日・「北

H

の出入りが見られる。〔2〕は上下二冊で、定家筆本(上冊は冷泉本系統(二九二首)の二種存し、大半の歌は重なりながらも、一部恵慶集には、おおよそ〔1〕古本系統(二九九首)と〔2〕定家

〔1〕の本文は、書陵部本と関西大学本が伝えられるだけで、前者家蔵、下冊は越桐家蔵)が現存し、上冊は転写されて広く流布する。

には二首の脱落がある。さて、本断簡は、②の「ふるゆきに」の歌

よって、定家は〔2〕の定家筆本が存するほかに、さらにもう一本はいずれの系統ともと知ることができない。ただ、この切の存在に家系統本には存する。そうすると、今のところこの二葉からだけでが、〔1〕の書陵部本には欠けているものの、関西大学本および定

1-123 高光集

恵慶集を書写していたことが知られる。

① 10 ·

ひとつそへてまいらせよとたまふやかてやまとうた

「子爵丹羽家并二某家御藏品入札	紅梅あはせ
そら(判読不能)	ふかきにほひもあらはれにけり
としをへておもふ心のし口口口口	さくらはなのとけき春の雨にこそ
□かへり□□なかにかきたる	おほせられしに

② 12 | | 14 「涛声銘蔵品入札図録」(大阪)昭和十六年六月五日

うくひすのすをくひそむるむめの花

いろもにほひもをしくもあるかな

世のなかはかくこそ見ゆれ 北宮かくれたまひつるころ

つくつくとおもへはかりのやとり

なりけり

おほむさうそこのゝち

おほそらのかすみにかすむよに たのみこしときはのやまも

こそありけれ

おなしころおほむふくにて 昭和五十一年九月・「国

「思文閣墨蹟資料目録」第六十三号

3 22 ·

文学古筆切入門」

師の大納言のむすめ左衛門督 いかなりしおりにか

つゆの□□ゐてのみもあかしつるかな いふことのなひきかたさにしら

にしの□□に (判読不能)

4) 24

かたときもわすれやはする 又これもおなし人に

つらかりし心もさらに

「某大家蔵品入札」(東京) たくひなけれは

らすると〔1〕と対立しており、後の二系統に属すると言えそうで もとの姿で、あとは増補された伝本であろうか。定家筆は、本文か 〔3〕正保版本歌仙家集本(四五首)の三系統存するが、〔2〕が

高光集は〔1〕西本願寺本(五二首)、〔2〕類従本(四三首)、

昭和十四年六月九日

られたのかは不明である。 だ、これはカタカナ書きで、またこの九首がどのような事情で添え に九首の高光歌を付加しているのを見ると、関係はなくはない。た 定家が高光集を書写したとの記録はないが、定家筆伊勢集の巻末

1-140 長能集

I

内わたりの人に

31 |-| | 33

ありへてもあらすやなそと世中を

(東京) 大正八年十月二十

- 52 -

うきをもいたくのかへやはする いのちあらはあらはとおもひのはへつゝ(ママ) なから心にあらぬ心なりけり つらしとはしらぬにあらすしり うくうきものとしりぬとならは おほあらきのとほのゝほかにすむ人を かみもきゝけむものにやはあらぬ たる人のもとにいきて返るとて 心ほそけなる山てらにこもり

れはなそやわかみのおしからなくに うくはあらてつれなきことのそはさ 口のにてものいひあかしてつとめて あめのいみしうふる夜□き

のきのしつくにおほせてそくる なかれあひてそこともしらすぬれたれは

まさはそのぬれきぬをわれさへやきむ

③ 57 -59 又女やいかゝいひたりけむ

うきをしらするしるしなりけれ 思てふことこそいとゝうき人の

しての山ちをやすくゆくへく やまひこの心をしはしのとめなむ

かすかすにたのめしことをあめつちの

しつくおほみたちよるのきのかす

「因州池田侯爵家御藏品入札」(東京)大正八年六月

みやまさくらはよきてはたやけ 「御子左手鑑」(靜嘉堂文庫蔵)

いろなる物は心なりけり いつこにかこまをとゝめむもみちはゝ

みすてゝゆけはそてそつゆけき

かりにみるそてたにあるをおほ

あら木のもりのしつくはいふかたもなし 「井上子爵家並某家所藏品入札」(東京)昭和七年四月

⑤80・ナシ はなおもしろきところに

さを山のたまをちかけにからにしき おれるこすゑのうへのしらつゆ

みてあれはなにそとゝへはかれをなむ 大弐のくたるに行(マイ)岡に火つけたる

かたをかにはたやくをのこかのみゆる

はたやくといふといひしかは

みつのもとのしらきくを

かけみれはあまつほしなりしかりとて

そこのみくつをてらすとはなし

「ふるかゞみ」 (二巻四号)

連続しており、どちらとも言えなくなる。 連続しており、どちらとも言えなくなる。

○ は、いずれとも重なることなく、本文も異なるなど、さらに第三のように、定家筆切と現存する二本(流布本・異本)との関連を見めように、定家筆切と現存する二本(流布本・異本)との関連を見られいよって、長能集の新たな歌一首が復元できることになる。この料によって、長能集の新たな歌一首が復元できることになる。この料によって、長能集の新たな歌一首が復元できることになる。このは本を想定する必要が起こってくる。

付記>以下の定家筆私家集切の考察は、「日本語・日本文化研究

衆」(大阪大学文学部)第4輯(今年末刊)に掲載の予定である。

- 54 -